

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2018年9月 NO.205



[もくじ]

- 2～3 音楽活動と少し裏話②ーヒラノ君との音楽活動ー…宮地克也
- 4～5 詩人だってモテたい。…瀧村鴉樹
- 6～7 ディズニーとともに②ディズニーの真の魅力・本物のハビネス…山崎勇人
- 8～9 はじめまして!…石田みや
- 10 「アンテナ」『劇団どくんぞ』との出会い…下尾仁
- 11 ポジティブな日々は得かもしれない…高橋早矢
- 12～13 高知市文化振興事業団6～7月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

音楽活動と少し裏話②

ーヒラノ君との音楽活動ー

宮地 克也

ヒラノ君は、僕が誰かと一緒に活動した初めての人です。元々ボイストレーニング仲間で、好きな音楽の話をし、好みが合うなあと思ったものの、特段親しくはなかったのですが。ある日ヒラノ君に誘われてカラオケに行き、お互いに作った曲を交互に聞かせ合いました。ヒラノ君は僕の曲や演奏について批評やアドバイスをくれ、僕は凄いなあと思いつながら無言で聞いていました。カラオケの後も呑みに行き、沢山の思いや夢を語りました。聞くと彼の父は編曲家で、その環境のおかげか、彼にはセンスや理論が備わっている様でした。

次の日からはユニットの初ライブを段取り、CD作成、練習、場

慣れと宣伝の為の路上ライブなど大忙しでした。二人のユニットG Round（グラウンド）のデビューライブの日。座席数を超えるお客様が来てくれました。ミスもあつたし、上手くいかない事が多かったけれど、いい相手を見つけたねと言って貰いました。

その後、CDを持ってライブをしながら沢山の人知って貰えるよう、そして活動の転機になるチャンスを探して活動していたのが東日本大震災の起こった頃です。この震災をきっかけに様々な事を考え、一時は大月町に帰省していましたが、ヒラノ君は何も言わず東京で待っていてくれました。

東京に戻ってG Roundの活動を再開したある日、来場者投票

で一位になった出演者が全国放送のラジオ番組へ出演できる、という内容のラジオ番組に出演することになりました。チャンスが来たかと、二人で念入りに準備をしましたが、一位を獲得することは出来ませんでした。けれど、ここでプロデューサーの大石さんと出会い、ラジオ局を変わりながら六年間、週一回のレギュラー番組を持たせてもらいました。まだ世間を知らずギヤリアの浅い時期に、制作スタッフの皆さんや沢山のゲストの皆さんと過ごした時間は今でも財産になっています。

そうしてラジオに出演しながら、大石さんには個人的に音楽や人生の事など相談に乗ってもらい、G Roundの活動を続ける中で、

現在所属するヒゲンジツシユギのギタリストとして活動を共にする、はんやるはるや（以下、はるや）との出会いがやってきました。

はるやはヒラノ君の高校時代の軽音楽部の同級生で、僕たちの主催イベントがきっかけで出会いました。初めて彼の演奏を見たのはそのライブのリハーサル。あまりの超絶技巧のギタープレイに笑いが止まらず、ずっと凄く凄いと大声を出して笑っていたので、はるやは僕の事を失礼な人だと思っていたそうです。

イベントの最後は僕たちの出番。ヒラノ君がはるやをステージに呼び込み、はるやと初めて演奏し、直感的に凄くいい！と感じ、残りの曲も全て参加して貰いました。これだ！と思った僕は何の許可も確認も取らず、「新メンバーはるや！宜しくお願ひします!!」とステージで宣言してしまいました。隣でヒラノ君が頭を抱え、でも少し嬉しそうな苦笑いを浮かべて「あーあ、言っちゃったよ」と言ったのを覚えています。今思えば、ヒラノ君の計算通りだったのかもしれない。

それからGRoundはギター三人のアコースティックユニットになりました。活動の軸は月に一度主催するイベント。一周年の時には、キャパシティの倍を超えるお客様が来てくれて、マスターにこっぴどく怒られました。反省はしていますが、店内に収まりきらないほど沢山のお客様が温かな視線を送ってくれていた景色を、僕は一生忘れません。マスターもお客様も、あの時は本当に失礼しました。

その後、TV収録ライブの機会があり、それに向けてドラムのサポートメンバーを迎え、ヒラノ君はベース、四人のバンド編成で本番に向けて準備しました。自分の作った曲がバンドアレンジになっていく。そんな初めての経験に僕はとにかく楽しく興奮し、頭の中はバンドの事ばかり。

迎えた本番当日。音も良く、照明も素敵で、超満員のお客様。大切な曲を大切なメンバーと。魔法にかけられた様な特別な時間のライブ。すっかりバンドの虜になっていました。

ライブには大石さんも来てくれ

て、今後のことなども相談に乗ってもらう中、僕たちは活動休止期間を経て、ヒゲンジツシユギとして活動を開始しました。

バンド名の由来は、理想主義でもなく現実主義でもない、自分たちの軸で世の中を見て行こう。という意味から造語でヒゲンジツシユギ。またコンセプトというか活動の指針として、大石さんが零した「宮地君は思ってる事とか感情が全部顔に出るな。人間が人間を歌う感じやな」という一言で「人間が人間を歌う、それ以上でもそれ以下でもない」と掲げました。

大石さんとプロのアレンジャーのモリさんとの初めてのレコーディング前日は、ちゃんと出来るか不安で殆ど寝れずに練習して過ごしました。そして当日。僕のアコギはどうかこうにか、はるやは流石の腕前であつという間にエレキを録り終わり、ボーカルはリズムも音程もズレ過ぎていて、これは大変だな、と苦笑いされながら、情けなく悔しい想いもしたけれど、必死にやっつてどうにか終わり。最後にヒラノ君のベースとコーラスの録音。この時、ヒラノ君がモリ

さんからかなり厳しく注意を受けました。レコーディングに臨める様な状態ではない、準備不足過ぎるという理由でした。その日はベースなしでコーラスの録音のみになりしました。プロの仕事の厳しさを垣間見た瞬間でした。今でも楽曲提供などタッグを組むモリさんに、当時の事を聞くと、「限られた時間の中で年間何百曲もやっつていくけど、こっちも本気だから出来る限りいいモノを作る為に一杯やる。勿論、クオリティーは必要だけど、一番ダメなのはそのレコーディングに向けてやっつてきたのが見えない音。どんなに下手でも、一生懸命やっつてきてたら分かるし、こっちもそれに応えたいと思う。あの時のヒラノ君の音にはそれが無かったからキツく言った」と教えてくれました。

後日ヒラノ君と話をし、人一倍努力家で誰よりも妥協を許さないお前がどうして、と聞くと、GRoundからヒゲンジツシユギになりコーラス担当に違和感があつた事、楽曲のアレンジに対して納得がいつてなかつた事を打ち明けてくれました。彼の感覚や拘りゆ

えだったのかもしれない。その後も沢山話し合い、準備を共にしてきましたが、初ライブの前にヒラノ君は脱退し、一人のシンガーソングライターとして活動しています。今でもたまに連絡を取り、主催するライブに出演して貰っています。あの時彼が脱退していなかったらどんな活動をしていたのか。時々そんな事を考えます。

一人きりだった僕に手を差し伸べてくれ、厳しくも温かく僕を成長させてくれたヒラノ君に今でも感謝しています。僕が今も音楽を出来ているのは、ヒラノ君がいたからです。

みやじ かつや

一九八四年生まれ、大月町出身。大月町役場を退職後ミュージシャンに転向。現在はヒゲンジツシユギのボーカルとして活動中。

詩人だってモテたい。

瀧村 鴉樹

夏は暑い。詩人はモテない。何を言っているか分らない人もいると思う。至極当然である。私もよく分かっていない。

私は詩を書き始めて来年で二十年になる。子どもが一人成人する年数である。その中で気付いたことは、詩人が全くモテないという事実である。

若い詩人に出会ったり、友人と話すときに偶にこういう質問をする。

「合コンに行つて、自分の話をするときに詩人と名乗れるか」と。九割九分九厘、「無理です……」という悲哀に満ち満ちた声と表情で返答が返つて来る。「え、ポエムとか書いているの?」と、嘲笑が聞こえるのが目に見えると言うのである。これは、由々しき事態で

はないか!

詩人だって、モテたいのである!

「え、どんなの書いているの?」
「え、聞かれたい。大学生くらいの女の子に尊敬の眼差しで見られた。代官山を歩いてそうなおしゃべりなお兄さんに「ちょっと読ませてよ」とか言われたい。代官山行つたことないけど。」

書店に足を運び、詩集を探すが見つかりにくい。詩集の棚がまっすないのである。たまに写真集の横のスペースにちょこっとねじ込まれている。寂しい気持ちになるが、これが現在の文学界に於ける詩と詩人の立場なのである。

私は奮起した。必ず、この悲憤慷慨な状況を打破せねばならぬと決意した。私にはモテ方が分から

ぬ。私は詩人である。高知の山奥で草木を愛で、言葉と遊んで暮らしてきた。男心も女心も、流行りの口説き文句も知らぬ。だが、詩の面白さを知っていただかなければ、この先、詩集の本棚ができる時代も、詩人がモテる時代も来ないのだ。

帯屋町商店街での路上ライブ、詩のボクシング高知県大会などを経て、オープンマイク形式のイベント、『にちようマイク』を開催した。こちらにも寄稿している下尾仁さんが経営する「じんぜんじゅ(Cafe)」にて、偶数月の第一日曜日、午後二時から行われるこのイベントは、表現の異文化交流を目的にしている。詩を外へと解放する為には、他の表現ジャンルと融合する場を作らねばならない。詩

人はよく詩の合評会や詩限定のオープンマイク等に行くが、他方向に開かれた場があつてこそ詩の面白さを知っていたけると私は考える。

オープンマイクとは、イベント当日にステージを開放し、観客の中から演者を募り、パフォーマンスしていたかどうかという、ある意味では「何が起こるか予測できない」イベントである。演者もその瞬間瞬間に決まってくる為、内容も全く予測が出来ない。私は朗読を行



うが、その他にも寸劇、音楽、コ
ンテンポラリーな身体パフォーマンス
ダンスなど、そのジャンルは多岐に
渡る。ちなみに私の中で印象に残
っているのは、自転車で突っ込ん
できた人である。他にはスプーン
を叩きながら歌う人、災害時にお
けるコーヒーマシンの入れ方を熱弁する
人など、様々なパフォーマンスが
いた。このオープンマイクにおいて、
観客とは演者であり、演者もまた
観客である。ステージと観客席の
間にある絶対的な壁は取り払われ、
障害の有無、男と女、大人と子ど
も、全てが「人間」として対等に
向き合える場になれるのではない



だろうか。また、その後の打ち上
げで語り合い、意気投合し、異な
るジャンル同士でのコラボレーシ
ョンに繋がってゆく場合もあり、
表現とは無限であると実感してい
る。

しかしまだだ。まだ足りぬ。

昨年二月より、現代詩投稿サイ
ト『文学極道』に選考スタッフと
して参加させていただいたことを
切っ掛けに、同年七月よりweb
上での生放送配信サイト『Twe
et Casting (通称・ツイ
キャス)』を使用した詩の番組『文
学極道公式ツイキャス』を開設す
ることにした。これはインターネ
ットを介した朗読会であり、合評
会である。ツイキャスは十代〜二
十代の若年層が使用者の大半を占
めており、ここでアピールできれ
ば必ずや詩がモテるであろうと踏
んだのだ。

番組では、私はMCに徹底し、
視聴者がコラボレーションするこ
ういう形で番組に参加し、自作の詩
を朗読する。この狙いが功を奏し、
毎週火曜日の放送では、順番待ち
の列が後を絶たなくなった。それ
まで詩に触れたことのなかった高
校生から、詩壇の最前線で活躍し
ているプロの文筆家やパフォーマンス

ーまで、様々な世代や詩歴の人た
ちが、地域の垣根を越えて交流す
ることが出来ている。

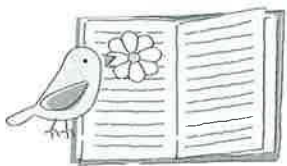
若者の活字離れや、本屋や出版
社の不況。その中でも、詩集は本
当に売れていない。私たちは、私
たちの愛する文化としての「言葉」
を全力で楽しみ、それを伝えてゆ
かねばならないのだ。そして、た
だ単に敷居を下げるのではなく、
「現代詩とは言語を使用したアー
ト作品である」とアピールし、詩
は、芸術は、一部の富裕層の慰み
ものになる為ではなく、全ての人
に拓かれた豊かな土壌であるとい
うことを、今を生きる若い皆さん
に知っていただき、詩への誤解を
解き、少しでも楽しさを伝えられ
ればと考えている。

今年は大分県で国民文化祭が開
催される。その企画の一つ、十一
月三日開催の「ポエトリ・サラダ
ボウル」でも、多くの方に詩を楽
しんでいただき、詩作の楽しさを
伝えることを目的としている。私
もパフォーマンス講師として招か
れることが決定し、全国から詩の
サラダを食べにくる皆さまの前で
詩の楽しさをアピールしてくる予
定である。そして私個人としては、
詩を通して高知の豊かな大自然の

中で生まれた言葉を発信し、少し
でも高知の自然の素晴らしさを伝
えられればと考えている。

あと、詩人ももっと増えて欲し
いし、最終的には合コンで堂々と
詩人と名乗られて、書店の棚を占拠
するほど詩と詩人たちが認知され
る時代が来ることを、切に望んで
いる。

詩人だって、モテたいのだ！



たきむら あき

一九八五年生まれ、北川村出身
現代音声詩人。オープンマイク
「にちようマイク」主催。現代
詩投稿サイト「文学極道」選考
委員でありツイキャス担当。

デイズニーとともに② デイズニーの真の魅力・本物のハピネス

山崎 勇人

デイズニーキャストとしてデイズニーファミリーの一員だった僕が思うデイズニーの魅力。それは、すべてが極められた本物という点。ミッキーマウスをはじめとするキャラクターやデイズニーランドなど、ウォルト・デイズニーが生み出したデイズニーの世界はどのようにして生まれたのでしょうか。このことを語る上でまず創業者であるウォルト・デイズニーの軌跡を辿ってみます。

「ウォルトの軌跡」

ウォルト・デイズニー（本名ウォルター・イライアス・デイズニー）は一九〇一年十二月五日イリノイ州シカゴで五人兄弟の四番目として生まれました。その後、ミズーリ州マーセリン近くの農

場で自然や動物に囲まれたことも時代を過ごします。幼少頃のウォルトは勉強があまり得意ではなく、その代わりコメディアンや大統領のものまねをしたり、芝居や漫画を描くことに夢中になっていたそうです。十六歳で赤十字に参加し、救急車などを運転する仕事に就きますが、彼が運転する救急車には絵や漫画が描いてありました。その後、ウォルトは兄のロイ・デイズニーと共に叔父から小さなガレージを借り、「デイズニー・ブラザーズ・スタジオ」を設立し、ここからデイズニーアニメーションの歴史がはじまりました。そして一九二八年、世界初のサウンド・アニメーション（音の出る映画）『蒸気船ウィリー』の公開でミッキーマウスが華々しくデビ

ューし、それから数多くのアニメーションが誕生しています。また世界中を魅了するデイズニーの世界はアニメーションにとどまらず、テーマパーク、アイスショー、ミュージカル、コンサートなどにも波及していきます。すべてに共通していること、それは本物を追求しているという点。どこをみても手抜きはありません。こども騙しのような演出もありません。これは創業者であるウォルト・デイズニーのフィソロフィーがしっかりと根付いたカルチャーによるものだと思います。

「テーマパークの世界」

僕は岡豊高校卒業後上京し、TDRを運営する（株）オリエンタルランドに入社しました。デイズ

ニーキャストとして東京デイズニーシーの海を航行する小型蒸気船のアトラクションに配属され、五年間働き学んだこと、それはウォルト・デイズニーのフィソロフィーです。デイズニーのフィソロフィーは一切妥協を許しません。ハード面はもちろん、キャスト一人ひとりのソフト面でもデイズニーのフィソロフィーを大切にしています。

まずソフト面の事例からご紹介します。デイズニーの世界ではキャストの行動基準となる四つの鍵を大切にしています。この鍵は優先順位が高い順に並び「安全、礼儀正しさ、ショー、効率」で、英語の頭文字をとってSCSEと呼ばれています。キャストはこのSCSEを守って行動することで、質の高いテーマショーとハピネスを提供しています。このSCSE



はどれか一つが欠けても、順番が入れ替わっても質の高いサービスが提供できません。並びの順にも意味があるのです。ディズニーのテーマパークはただの遊園地ではありません。五感を使ってこどもから大人までが楽しむことができ、真のファミリーエンターテインメントを提供している施設だからこそ、このソフト面を大切にしていきます。

次にハード面では、パークの建物ひとつとっても本物を追求して造り込まれています。ゲストが普通見ないと思うような場所でも細かいストーリーがあります。施設には必ず一つ一つ、バックグラウンドストーリーがあり、キャストはそのストーリーを演じているのです。僕が配属されていたアトラクションの小型蒸気船には乗り場が三つあり、ワインの出荷場だったり、タラの缶詰工場だったり、現地の人々が使う波止場というストーリーがそれぞれにあります。乗り場に置かれている飾りには、実際にディズニー社の社員がストーリーの舞台となっている現地を集めてきたものが置かれたりもしています。

アニメーションの映画製作から



始まったディズニーだからこそ、高いレベルで本物を追求するカルチャーがあり、本物とともに常に進化し続けているから、世界中のゲストを魅了し続けているのではないかと思います。ウォルト・ディズニーが残した名言の中に「ディズニーランドは永遠に完成しない。この世界に想像力が残っている限り、成長し続ける。」というものがあります。

常に進化を続けるディズニー。テーマパークでも常に進化を遂げ、これからもゲストを魅了し続けてくれることでしょう。

「ディズニーシアトリカルの世界」

この本物を追求するカルチャーはディズニーシアトリカルでも共通しています。ディズニーとタッグを組んで日本国内でミュージカル作品を上演している劇団四季。今は四つのディズニー作品を各地で上演していますが、こちらも一度観劇すると虜になってしまいます。現に僕がその虜の一人です(笑)。

その他、全国ツアーという形でディズニー音楽をオーケストラが奏でるコンサートや氷上のミュージカルなどが毎年各地で上演され、ディズニーマジックが随所に盛り込まれた作品で観客をディズニーの世界に引き込んでくれています。

「これからもディズニーファンとして」

ディズニーの世界は、アニメーション、テーマパーク、アイスショー、ミュージカル、コンサート、どれをとっても本物を極めているからこそ、ゲストの心に楽しい！や嬉しい！を感じられる「真のハピネス」を提供できるのです。

僕もディズニーファンの一人としてこれからも大好きなディズニー尽くしの人生を楽しんでいくこ

とになるでしょう(笑)。またキャスト時代の学びを活かし、地元高知でディズニー流のコミュニケーションスキルをシェアする会やディズニーファンコミュニティ「D's KOCHIサロン」の主宰などを通じて、高知の皆さんにディズニー流の本物の「ハピネス」を届けたいきます。高知のディズニー好きの方、繋がりますように。

二〇四号に続き、最後まで読んでいただき、ありがとうございます。ディズニーの魅力が少しでも伝わったでしょうか。これを機にみなさんもウォルト・ディズニーが残してくれた「本物のハピネス」を感じてみてください。

やまざき はやと

一九九〇年生まれ。高知市在住。NPO法人で勤務する傍ら、「D's KOCHIサロン」というイベントを主宰し、高知に居ながらディズニーに親しみ、楽しんでもらえるよう邁進中。

はじめてまっつてー!

石田
みや

こんにちは。「劇団どくんご」という劇団で役者をしている石田と言います。

今回は「劇団どくんご? 劇団どくんごってなんだ?」という高知のあなたに向けて! ちょっとでも興味を持ってもらえたらと、この場に参上しました。

劇団どくんごは鹿児島を拠点にしている劇団です。そして旅をする劇団でもあり、さらにさらにテントを持ち歩いて屋外に劇場を作り芝居をする劇団でもあります。ゴールデンウィーク頃に鹿児島を出発し日本列島を北上し、夏のピークを北海道で迎え、今度は南下して秋の終わり頃にまた鹿児島へ

と帰る。高知はいつも十月ぐらいに訪れていて、直前の大阪辺りで肌寒く感じて「もう秋も深くなっただのかなあ」と思いながら瀬戸大橋を渡ってくると「まだ暖かい」と瀬戸内の穏やかな気候にホッとします。

さて、劇団どくんごはどういうものか。

なんとか上手くお伝えしようとするの少ない語彙力から言葉を探し、あーだこーだお伝えしようとしたが結果としては、「とりあえず一度見に来てください」としか言えません。

やってるくせに説明もロクにできないのか!? とお叱りをうけるか

もしれません。ごもつともです。

しかし実際そうなんです。これまでどくんごを見て、人に勧めようとした人ならばきつと皆一様に頷くことでしょう。

何故ならどくんごの芝居はテントの劇場の中に入って芝居を見ることがなによりの魅力であるからです。空き地に建てられたテントが夜になると明るく光っている。どこか入りにくいような雰囲気の中「えいっ!」と思いついて入ると独特の衣装やメイクをした役者が、受付をしたり客席誘導をしながらぶらぶらしたりしています。定刻になると「芝居」? のようなものが始まります。



「出し物」という言い方の方が適しているかもしれません。役者が代わる代わるステージに上がり一人ずつ、時には二人でそして全員で一つの出し物を次々にやっつていって気がつけば終わっている。その芝居のような出し物を目撃する体験がなによりの魅力だと思っています。

かく言う私も参加する前はお客さんの一人でした。

いつの間にか街の片隅に建てられていたテントの付近に「いらっしやーい」となんとなく呼び込みをしている役者がいて、恐る恐る入ると客席のようなものがあった。何が始まるんだろう怖いなあと思いつつ座っていました。そうすると「じゃあ始めます」と

だからだとした口調で言うやいなや、ものすごいテンポで次から次へと出し物が

繰り広げられます。なにがなんだかわからないなりに、そのジェットコースターのような勢いが心地よくなっています。後半の方ではテントを囲っていた布が取り払われ、舞台上で演じていた役者がテントを飛び出してダァーツと向こうの方まで走って行ってしまったのです。見ていた観客はわあっと喜び、子どもが「まだ走ってるよ」



と言っている。舞台上で起きることだけでなくその時間の丸ごとを夢のように不思議な景色にしてしまうのに衝撃を受けたことを覚えていきます。

なので私は皆さんに「とりあえず一度見に来てください」としか言えないのです。見にいらして、

なかなか日常では体験できない景色や雰囲気味わっていただければと思います。

難しいことは一切ありません。あなたが少しでも「なんとなくいいな」と思う瞬間を見つけてくれたらとても嬉しいです。いろいろなものが詰まっているのできっとどの瞬間かは「いいなあ」と思ってもらえたと自信を持っています。

それから旅しているということも私たちの劇団の特徴です。

これからは私個人的な話なのですが、数ある公演地のなかでも高知がとても好きなんです。南国気質というのでしょうか？ 会う方々元気でハツラツとされている印象を持っています。あと、私の出身は熊本なのですがどことなく高知の方の雰囲気や熊本の人の雰囲気似ている気がするのです。旅をしていて教えてもらったのですが、三大頑固県というのがあるみたいで、それが青森、熊本そして高知。それを象徴するようにどの県にもその県民性を指す言葉があつて青森の「じよっぱり」熊本の「もっこす」そして高知の「いっしょせん」。

これを聞いた時になるほど！と膝

を叩きました。それからお酒が好きなこと、城下町だったこと…などなど。そんなこともあつて高知に辿り着くとホッと落ち着くのです。

さてさて！ そんな高知行きたさで、今年も十月十二日（金）、十三日（土）の日程で高知に行きます！ 劇団どくんご「誓いはスカレット」高知公演！

二〇一六年以来二年ぶりの高知公演。とても楽しみです。そして少しでもたくさんの方に劇団どくんごに興味を持っていただけたら嬉しいです。それでは、十月にお会いしましょう！

いしだ みや

一九九〇年生まれ、熊本県出身。劇団どくんご所属。

「誓いはスカレット」高知公演は、十月十二日（金）、十三日（土）十九時開演。丸ノ内緑地内特設小屋テント劇場にて開催。

<http://www.dokungo.com/>

「アンテナ」

『劇団どくんご』との出会い



下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がる事ができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。

平成二十二年、知人から「『劇団どくんご』って知ってますか？」とメールが送られてきた。

僕が知らないですよと返信すると、知人は、実は私もよく知らないが、高知公演の受け入れ先をやることになったと。しかも、どくんごの情報は、全国を旅するテナト芝居劇団であるということだけ。お芝居をやっている僕なら力になってくれるのではないかとメールを送ってみたのだ。だが、僕もどうしていいかわからず、とりあえずチラシなどを色々な所に配り宣伝のお手伝いをさせてもらうことにした。

月日は流れ、芝居は本番の日。僕は会場に着いてビックリした。なんともいえない異様な雰囲気。実際には見たことはないが、昔の見世物小屋を思わせるような出で

立ち、受付にはすでに役に入った男性とも女性ともわからない人がぶつきらぼうにチエツと舌打ちをしながらチケツトもぎりをしていた。これは、無事に帰れるのかと不安に思ったぐらいだ。

辺りを見渡したら手作り感満載、そして入場者は十人程。開演までには増えるかなと思っていたが、変化なく開演となった(すみません、集客出来なかつたです)。だが、芝居が始まると、すぐに劇団どくんごの世界に引き込まれた。ピンピンと魂を揺さぶられる熱量、動き、声、演技、音楽、踊り。なんなんだこれとはと、僕は劇団どくんごに魅了されてしまった。

あつという間に芝居は終わり、その場で打ち上げが始まった。しかし、さっきまで舞台で演じていた役者たちに声をかけるのも恐れ多く僕は早めに切り上げた。

だが家に帰ってもまだ余韻が残っている。頭の中は、どくんごのことばかり、しばらく頭から離れ

なかつたのである。

もちろん、次の年も公演を観に行った。やはりすごい。すごい、すごいぞどくんご!!この時の打ち上げでは、かなり話をさせてもらった。そこで、来年からは幕間に十分程の地元ゲストコーナーを設けるのでどうですか?と問われたが、凄腕舞台を見た直後に同じ舞台に立つのは考えられず、ちよつと...と言葉を濁した。

それからしばらくして、僕が出演したお芝居のお見送りをしていたら、一人の男性が「芝居、拝見しました。劇団どくんごの健太です」と挨拶してきた。

僕が「えー!なんでいるんですか?」と尋ねると、来年の公演場所を決める為に来高し、僕の店を訪ね、店の前に貼った芝居出演のチラシを見て来たとのこと。そして、芝居を見て、改めてゲストで出てくれませんか?と言ってくれた。もう断る理由などない。僕は健太さんと固い握手を交わした。

そして、あつという間にゲスト出演の本番を迎えた。年々観客数も増えており、なんとこの日は満席。一度見たらやみつきになるとどくんごパワー恐るべし!!

僕は友人と三人で「日本髪フアイト」という演目をやらせてもらった。内容は、二人の男が日本髪のカツラを被って闘い、もう一人が実況中継をするという、なんとお訳のわからない内容だったが、

メンバーが気に入ってくれ、それからのゲストはずっとやらせてもらっている。しかも、メンバーが公演とは関係なく僕の店に訪ねてきたり泊まってくれる。昨年は、初めてテントを立てるお手伝いをさせてもらったが、本当に大変な作業であった。

まず団員たちの寝るテント(楽屋)を作り、芝居をするテントを立て、百人程が座るイスを組み立て、照明のチエツク。あつという間に時間は過ぎた。この労力を使つてからのあのテンションでの芝居、まったく頭の下がる思いである。

僕が初めてどくんごを見た時の客数は十人程だったが、今では二日公演がほぼ満席でファンも増えていて嬉しい限りである。今年も十月十二日(金)、十三日(土)に高知城下の丸ノ内緑地にやってくる。

今では全国での公演場所も増え、高知公演は二年に一回となっているので、これを見逃すと次は二年後になってしまう。

見逃すわけにはいかない。ぜひみんなで見よう、劇団どくんご!!

しもお ひとし

一九六九年生まれ

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

ポジティブな日々は 得かもしれない

高橋 早矢

私は現在初めての子育てに右往左往しています。愛知県在住なのですが、夫の仕事の関係で地元の高知で暮らしています。

子育ては確かに大変ですが、子どもが生まれる前に聞いた噂話やネットで集めた子育て情報から想像していたほどしんどいと感じないのは娘かわいさか成長に対する喜びか：不思議なものです。もちろん両親のサポートがなければ、こんなふうな気持ちに余裕を持つこともなく、このように漠然と考えたことを文章にする気持ちにもなれず、想像したほどの大変さではないんだなんて思わなかっただろうとも思うのですが…。

子育てをしていて、娘の成長を近くでずっと見ていられる現状をととても恵まれていると感じています。夫と離れて暮らしているからより強く思うのかもしれないし、毎日娘と一緒にいる私を羨んで夫

がズルいと言うからかもしれません。他の人と比べるのはあまりいいことではないのですが、身近な人ほど比べてしまいます。もし夫と一緒に暮らしていたとしても、夫が人の輪に入りたがる性格なこともあって、生まれたばかりの時期は、一日中子どもと過ごしている私を夫は羨ましく思うのでしょう。最近、私はこの時期の娘との時間を母親の特権かもしれないと思います。

妊娠・出産は男性には経験できないもので、つわりは辛いし出産のときは信じられないくらい痛いし、そういう経験をする機会のない男性を羨ましく思ったことも、ズルいと思ったこともあったのですが、今ではすっかり考え方が変わりました。私が母親の特権と感じた時間を過ごすなかで、辛いこととの後はいいことがある、落ちるところまで落ちたら上がっていく

しかない、そんなふうな気持ちの持ちようが以前とはだいぶ変わってきたからだと思います。

私が男性をズルいと思っていたのと逆で、男性が女性をズルいと思うことも世の中にはあるでしょう。小さいころであれば小学生・中学生のとき、「なんで俺らあばっかり」「なんで女子は怒られんが？」と先生に怒られた男子が文句を言っていたのを思い出します。最近では映画館のレディースデーなどもそうでしょうか？

小学生のころ「なんで女子は怒られんが？」と男子が言っているのを聞いて、なんでそんなふうに言われたいいけないの？と思っただけがあります。今となつてはその一言に引かかったのは、別に女子だって怒られないわけじゃない！と思っていたのに、何も言うことができずどこかもやっとしていたからではないかと思うのですが、よほどそのころの私には受け入れられない一言だったのです。生まれ変わったら男女どっちがいい？という友達とのたわいもない話にも、頑なに男の子がいいと答えていたほどでした。ですが最近では女の子に生まれてもいいかもしれないと思うようになりました。小学生の私に「細かいことは気にしない。男の子より怒られ方がや

さしくていいでしょ？」と言いたいくらいです。

生まれるときに性別を選べるわけではないですし、来世のことなど考えたところでどうしようもないのですが、些細な過去のできごとから解放されたような気がしてよかった、得をしたと思ってしまう。元々ちよつとしたことで機嫌がよくなるポジティブ寄りの思考だからかもしれません。きっとポジティブな人ほど得したと思うことが多く、嫌な気持ちになることが少ない日々を過ごしている、実際に得をしているのだと思います。

三十代になつても長年の考えが変わることを体験し、まだまだ先の長い人生をポジティブに得しながら過ごすことを読者の皆様と一方的にお約束して結びにしたいと思います。長々と書きましたが、最後まで読んでいただきありがとうございます。

たかはし さや

一九八七年生まれ、南国市出身。夫の海外赴任を機に里帰り出産を決意し、現在も地元・高知で育児中。

6 ~ 7月の事業から

フィジカルシアターカンパニーGERRO 「家族という名のゲーム」

二〇一八年六月二十八日(木)、小ホールにてフィジカルシアターカンパニーGERROによる「家族という名のゲーム」を上演しました。

フィジカルシアターカンパニーGERROは、二〇〇三年にかかるぼーとの大階段を使って行った伊藤キム+輝く未来の「階段主義」でも来高されていた伊藤キム氏が二〇一五年に新しく立ち上げたカンパニーで、メンバーはダンサーだけでなく俳優や声優など多岐にわたります。

今回の演目「家族という名のゲーム」は、二〇一六年にGERRO活動プロジェクトと題して高知・北九州・神戸で行った地元の人とのワークショッププログラムに端を発し作られた作品です。GERRO活動プロジェクトの際、高知でやって北九州・神戸でやらなかったこと、高知・北九州でやって神戸でやらなかったことなど内容は様々ですが、それぞれのワークショップのプログラムが組み合わさって、言葉を「意味のある音」としてではなく「ただの音」として表現する、そのために身体や舞台セットを駆使するという非日常的な空間ができて上がっていました。

初めてGERROの公演を観る人にとってはよくわからなかったり、作品に入り込めなかったり不思議な空間だったかもしれま

せん。アンケートには、「理解不能だけでなくなんとなく面白かった」「意味が分からなかった」「日常生活の中で読解できない言語表現を考えつつ見ていました」といった意見がありました。

また本公演にあたり、過去の事業の取り組み方を振り返り、今後の課題も見つけました。高知GERRO活動プロジェクトの発表会は入場無料で来場者の事前受付はしていなかったため、当時ワークショップへの参加申込をしにくかった方にしか本公演を個人的にお知らせすることができませんでした。高知GERRO活動プロジェクトの発表会の来場者に再度来場してもらおうと鑑賞者の更なる広がりができたのかもしれないと考え、今後の事業に活かしていきたいと思えます。

(来場者数・六十名)



Culチャーず

平成30年度会員特典が追加されました！

①パルコ企画制作「チルドレン」

10月10日(水) 18:30開演
S席7,500円、A席4,500円→S席6,750円、A席4,050円
招待枚数はA席10枚

②橋爪功主演「父」

3月6日(水) 18:30開演予定
S席7,000円、A席4,000円→S席6,300円、A席3,600円
招待枚数はA席10枚

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

キッズフリーマーケット2018

売るのも買うのも子どもだけのフリーマーケット「キッズフリーマーケット2018」を七月一日(日)に開催しました。

遊びを通してお金やモノの価値を学ぶことを目的とした本事業は、毎年たくさんの子どもたちの応募・参加があり、今年も百十のブース数に対し二百七十九組の応募があり、午前中の準備のときから賑やかな時間が続きました。

株式会社高知銀行のスタッフによる相談・両替ブースは今年も大盛況で、売り上げが伸びない、お客さんが少ないといった相談をする子どもたちや、売り上げを伸ばすためタイムセールをしたら用意していたお釣りの金種では賄えなくなったといった子どもたちが押し寄せました。

会場内には決められた年齢の子どもたちしか入場できないので、下級生や幼稚園の子どもにも付き添って会場を回っていると、お店を出している上級生が下級生に所持金の額を聞いて、「ここに置いてあるものは買えるよ」と教えていたり、どうしても欲しいものは少しおまけしてあげたり、子

もたちの自主性ややさしさを感じました。こういった下級生は自分が上級生になったときに下級生にやさしくしてあげられるのだろうと、子どもたちがお互いに成長の糧になっている様子を見ることができました。



〈参加者数・千名〉

桂九雀で田中啓文、こともあろうに内藤裕敬。笑酔亭梅寿謎解晰～立ち切れ線香の章

田中啓文著「笑酔亭梅寿謎解晰」(集英社文庫)を桂九雀が! 脚本・演出は南河内万歳一座の内藤裕敬。朗読? 語り? 芝居? 落語? どんなものが出来上がるのか?

公演日:平成30年10月21日(日) 14時00分(開場13時30分)

会場:高知市文化プラザかるぼーと 小ホール

料金:全席自由 一般3,000円 高校生以下1,000円(当日各500円増)※未就学児入場不可

■落語ワークショップ参加者募集

落語家の桂九雀氏によるワークショップを開催します! 普段経験することのない落語の技術指導を受け、本番の舞台上で落語を披露してみませんか? ワークショップと本番の2日間ご参加いただける方を募集します。参加を希望される方は、高知市文化振興事業団まで、電話にてお申し込みください。

開催日:10月20日(土)14時~16時

会場:高知市文化プラザかるぼーと 小ホール

参加費:無料

定員:先着4~5名(9月1日(土)8時30分~受付開始)※定員に達した時点で締め切ります。



大政奉還と 王政復古



風俗歳時記

大政奉還と王政復古は同じようなものだ、長い間思っていた。ところが違うのである。

大政奉還の建白を徳川慶喜に対して行ったのは、元土佐藩主の山内容堂だ。容堂がこの案を進言したのは土佐藩の家老後藤家二郎である。

そして後藤家二郎がこの案を教示したのが坂本龍馬だと言われている。史実だとすると(否定する見解もあるようだ)、龍馬は二人の権力者―山内容堂と後藤家二郎―を介して、徳川慶喜と政治交渉を行ったことになる。この「飛石コミユニケーション」にはロマンがある。一介の郷士の息子が、最高権力者と対等に渡り合うというドラマの痛快さだ。

さて龍馬が(土佐藩を介して)提案し

た内容は、意外に知られていないのだが、次のようなものだ。徳川家には公称八百万石(実質は、その半分以下とも言われているが)とされる巨大な直轄領がある。この直轄領に対する支配権は保証しますよ。それ以外の大名領に対する支配権を朝廷に奉還しなさい。悪い取引ではないでしょう。日本全土を治めるのは徳川家にとっても負担になっているのではないですか―というものだった。

この取り引きに徳川慶喜が乗ったのである。だから龍馬の新国家構想の中では徳川家の存続が前提とされている。日本の内戦を回避するためには、それは必要なことだと龍馬は考えていた。また、徳川家に「関ヶ原」以来の恩義を感じている山内容堂にとっても、徳川家の存続は

意に叶うものだった。

ところが、龍馬、容堂の思いに反して、八百万石の徳川領を召し上げて、徳川家を実質的に抹殺するというのが、王政復古の大号令であり、「明治維新」の始まりである。

号令が出されたとき、龍馬はすでに暗殺されていた。幕臣の一部や東北の諸藩は、直轄領召し上げ等を不当として激しく抵抗し、戊辰戦争と呼ばれる内戦が勃発する…。

去年は大政奉還五十年。今年が明治維新五十年。この二つを同列にあつかうことに違和感を感じている。

(本の虫)



高知を撮る

第34回写真コンテスト入賞作品

神様の結婚式

(平成29年10月12日 須崎市鳴無神社)

辻 慶二

昨年の10月に浦ノ内の鳴無神社で行われた神事「神様の結婚式」の様子です。子供の視点を意識して撮影しました。



東京・新宿の「歌声喫茶ともしび」が多くのアンコールにこたえて再びかるぼーとに登場！
カードに書いたリクエストを客席から集めながら、歌集を手と一緒に歌うコンサートです。
「歌声喫茶」を知ってる人も知らない人もおなかの底から歌いましょう！

【日時】2018年10月13日(土) 開場13:30 開演14:00

【会場】高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

【料金】全席自由(未就学児入場無料)

前売り 一般1,500円 高校生以下 800円
当日 一般2,000円 高校生以下1,000円

【主催】公益財団法人高知市文化振興事業団

【後援】高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、
KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、朝日新聞高知総局、毎日新聞高知支局、
読売新聞高知支局

【協力】歌声喫茶をこよなく愛するみなさま

【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

高知市立中央公民館事業 第186回市民映画会



市民映画会は、文化の薫り高い劇映画を低廉で提供し、教養の向上を図ることを目的に1951年より開催している歴史ある映画会です。

【日時】

2018年9月13日(木)、14日(金)

■ルージュの手紙

11:00～、15:25～、19:40～

■ビッグ・シック ぼくたちの大いなる目ざめ

13:15～、17:30～

【会場】

高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

【料金】

全席自由

一般 前売り1,300円 当日1,500円

割引 前売り1,000円

(学生証、長寿手帳、障害者手帳など)

※1枚のチケットで両作品を鑑賞できます。

【お問い合わせ】

高知市文化振興事業団 088-883-5071

風俗

江ノ口川

鹿兒島に転勤している知人が今年の夏も高知に帰ってきた。彼は大阪生まれで一度高知に転勤してきたことがあってすっかり高知が好きになった。高知で生まれ育ったわけではないが、ただただ高知が大好きだから。毎年何回か休みを取って高知へ「帰って」来るのである。
この八月も高知に「帰ってきた」。

その彼に高知のどこがそんなにいいのが尋ねてみた。高知の風土や食べ物、何よりも明るい人間性が好きだという。土佐弁を使って高知の人間のようにも振る舞う。そんな彼が今回いつもと違って苦言を吐いた。「江ノ口川が汚い。なんであんな汚い川のままだ！」
私は一瞬、不覚にも「エッ」と声を

今号の表紙

「秋のシルエット」

中屋 未来

秋という季節で思い浮かべたコスモスの花のシルエットを鮮やかな水彩絵の具で描きました。ただ単にベタ塗りをするのではなく、カラフルにすることによってコスモスの綺麗さを表現し、秋を抽象的に表現しました。

(なかや みく)

国際デザイン・ビューティカレッジ2年生

発した。しかも「こう見えても昔から比べれば随分きれいになった」と。そう言っただけで、確かに汚いなあと、うんざりな感じがこみ上げてきて恥ずかしくなった。
「昔に比べたらきれいになった」といってもそれは通らない。昔がどんなに垂れ流して鼻をつくような臭いがあったとしても。そんな昔があるために、「いま現実に汚い」という現状に、私は麻痺していたのかも知れないと、その彼の言葉で気づかされてしまった。
どんな立派なホールや施設、図書館をつくっても、街中を流れる川がこんなに汚いままに放置しておくのは、「観光高知」が聞いて呆れる。「よさこい祭り」に他県から来られた多くの人たちから「なんでいまだにこんな汚い川を放置しているのか」と、顰蹙(ひんしゆく)を買ったとしても不思議はない。そう思うと、いてもたってもい

(未完)

公益財団法人高知市文化振興事業団 主催事業のご案内

文化高知

No.205
2018年(平成30年)9月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL:088-883-5071 郵便振替016800-514869

【作】ルーシー・カークウッド 【演出】栗山民也 【翻訳】小田島恒志

【出演】高畑淳子 鶴見辰吾 若村麻由美

母なる地球からの警鐘…
ウエストエンド発、ブロードウェイ経由、
今、日本でこそ上演すべき
注目の人間ドラマ。

PARCOプレイ-X2018

THE CHILDREN

チルドレン

KOCHI 10月10日(水) 18:30~

高知市文化プラザかるぼーと大ホール

全席指定(未就学児入場不可)
S席(1・2階)7,500円 A席(3階)4,500円
公益財団法人高知市文化振興事業団
TEL:088-883-5071 E-mail:kikaku@kfca.jp
www.parco-play.com

<http://www.kfca.jp>

e-mail kikaku@kfca.jp